

====このお便りは私が担当する太極拳教室の皆さんに毎月（今年度から8月も！）お届けしています。====

## トピックス 「平成万葉集」に入選しました！

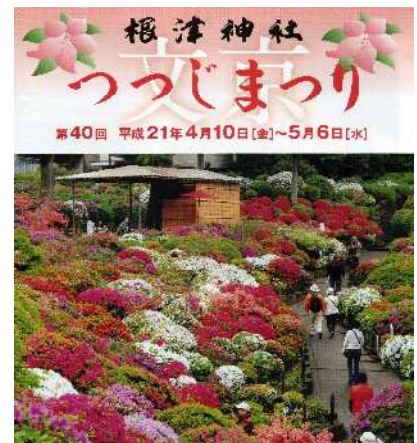
日本最古の歌集である万葉集編纂から今年が1250年になることを記念して、平成人による万葉集を作ろうという趣旨で、読売新聞社と「万葉の心を未来へ」推進委員会の主催で募集していた「平成万葉集」に昨年秋応募しておいたところ、次の一首が入選しました。さる4月29日の読売新聞の発表によると、全国46000首の応募歌から、一人1首で合計1000首の歌を選出したとあります。「平成万葉集」は7月ごろ出版される予定です。

### 「蟹工船」がいままた読まれるニッポンの戦後はいったい何であったか

小林多喜二の「蟹工船」が若い人たちに愛読されているといえます。長時間労働、サービス残業、非正規雇用の増大、派遣切り、賃金切り下げなど、日本の労働者の置かれている状況の厳しさがこの背景にあると思います。労働運動に傾注していた私の若い頃からは想像もつない後退です。自省の意味をこめて作った歌であり、今回「平成万葉集」に取り上げられたことは大変嬉しく思います。

### 根津神社つつじまつりのパンフレット採用されました

毎年恒例の文京区根津神社のつつじ祭りのパンフレット（写真）の見開きページに私の彩色した江戸名所図会「根津権現」が採用されました。以前に塗り絵仲間と同神社に奉納してあったものですが、今年は図らずも私の作品が使われたということです。



## 左顧右眄~さこ・うべん~ (27) 【第4話 気と気功をどう理解するのか】

### 3) 「気」の解釈、日中の違い

中国古代王朝、周の時代に編纂された易経（五経のひとつ）には“天地の万物はすべて陰陽二種の「気」によって構成され、二気の配分の割合によってすべての物や、すべての事のありようが決定される”と書かれています。また、前漢（前206～紀元9）時代に編纂された思想書「淮南子」にも“煩れる気は虫となり、精れし気は人となる”とあります。万物の元である「気」の凝縮されるその具合の違いによって、人にも生まれ、虫にも生まれるという「気」についての解釈です。すなわち、「気」は「⑩万物生成の根源の力」であり、「⑪万物のもとになるもの」として捉えていました。

ここから進んで、ヒトについていえば、「②呼吸」であり「⑤心身の活動のもとになる力」でもあるわけですし、さらには「⑥心の働き」「⑦生まれつき。持ち前。」などでもあるわけです。

注意しなければならないのは、これはあくまで中国における「気」の解釈、使われ方であるということです。日本では（少なくとも現代では）いささか異なります。たとえば、手持ちの国語辞典（三省堂版）の「気」の項は、一、大気、空気 二、雰囲気、空気 三、独特の匂いや味 四、心（のはたらき）五、気分、気持ち……となっていますが、漢和辞典にある「⑩万物生成の根源の力」や「⑪万物のもとになるもの」は含まれていません。

### 4) 古来「気」は万国共通の認識、概念であった

実は、世界各地の古代文明においても、中国の「気」に相当する言葉が、同じような概念として用

いられていたのです。これは大変な驚きですが、二、三の例を挙げてみましょう。

### 古代インド；サンスクリット語の「プラーナ (prana)」

ヨガをやる人にはおなじみの言葉ですが、普通「生命エネルギー」とか「宇宙エネルギー」とか訳されていて、“宇宙に存在するあらゆるものへ生命を与えるエネルギーのこと”であり、また「呼吸」を意味する言葉でもあります。

### 古代ギリシャ；ギリシャ語の「プネウマ (pneuma)」

吹く、息吹、などが原義で自然界における息吹というような概念にも用いられていました。古代ギリシャの思想家アナクシメネス（前 585～前 525）は万物の根源は気、空気（プネウマ）であるとして、“それが凝縮すれば物質に変わる”という論を展開したといわれています。

### ローマ帝国；ラテン語の「スピリトゥス (spiritus)」

プネウマをラテン語に訳した言葉がスピリトゥスで、同様な概念を持ちます。ここから英語の「スピリット (spirit)」やフランス語の「エスプリ (esprit)」、イタリア語のスピリト (spirito)」などが派生しています。ちなみに、英語の「スピリット (spirit)」を英和辞典で引くと；

『「呼吸」が原義。生命力の根源は息の中にあると考えられていた。』と元の意味を説明した上で、現在の訳語として、1. 精神、心 2. 霊、靈魂…3. 気分…4. 気力……などを列記しています。

### 古代パレスチナ；ヘブライ語の「ルーアハ」

旧約聖書では「風（ルーアハ）は何処より来たりて、何処へと行くかを知らず。されど、風の吹くところ命が生まれる。」というように用いられていますが、これはプネウマの解釈と酷似しています。ちなみに現在キリスト教で言う「聖霊」も、古くはプネウマ (pneuma) と呼ばれ、現在ではセントスピリット (saint spirit) と呼ばれているようです。

このように古来、どの文明にあっても、「生命エネルギー」「万物の元」「霊気」「呼吸」などが同一の言葉、概念であったことは非常に重要なことであると思います。

このような概念が、特にヨーロッパ、キリスト教社会においては徐々に希薄化し、ないしは否定されて今日に至っているわけですが、中国やインドにおいてはヨガや気功、あるいは風水、あるいは東洋医学などの形で連綿と持続されている、さらには世界へと再び広がりつつある、というふうに理解すると分かりやすいのではないのでしょうか。

## 旅をうたい拳を詠む

### 春を訪ねて

春暖にくちなわ池より這い出でて

花見の人波すこし乱れる

咲き満ちて後は散るのを待つばかり

美しいとも哀しいとも見ゆ

(以上；小石川後樂園にて)

純白の兜かぶりて岩木山

白神山地と威を競うなり

さえずりのように聞こえる津軽弁心地よけれど皆目解からず

(↑金木町の津軽鉄道花のトンネル)

むくどりが花芽食みしとこの春はいささかさびしい花のトンネル

(以上；津軽旅行にて)

**健康妄語録** 今回は休載します

